

## ウイグル語学習書としての『高昌館来文』の性質について

更科 慎一

### 一、はじめに

明代の中国で、『華夷訳語』と総称される一連の異言語学習書が編纂された。日本の学界では石田幹之助『女真語研究の新資料』(1930)以来これを甲、乙、丙の三種に分類している<sup>1</sup>。本稿で扱う資料は、そのうちの乙種本の一語種を成す『高昌館訳語』である。乙種本は外交文書を扱う四夷館で編纂され、当時中国の周囲に通用していた十種の言語<sup>2</sup>を含むが、本書は漢語と高昌語の対訳教科書で、乙種本の他の語種と同じく、「雑字」と呼ばれる語彙集と、「来文」と呼ばれる文例集を内容とする。

一般に二言語、あるいは多言語の対訳資料は、言語史研究の上で大きな役割を果たす。特に文例集である来文は、記述されたそれぞれの言語の語彙や文法構造を明らかにする独自の価値があることが当然期待される。ところが、各言語の乙種本の来文の諸先行研究においては、来文の異民族言語の文面が、漢語文の生硬な逐語訳であり、その言語の文法や語彙の構造を無視することが少なくない、と指摘されている。Ligeti(1967-1968: pp.267-268)は、その研究対象である高昌館来文の翻訳の質が極めて低い点を指摘し、他の研究者の証言も引用しつつ、女真館(ツングース系の女真語を記述)と韃靼館(モンゴル語を記述)の来文もまたそうであると指摘している。乙種本の「来文」を扱ったわが国の先行研究においても、異民族言語の文面が漢文の逐語訳である点が指摘されている。ここにそのいくつかを挙げてみよう。

『韃靼館訳語』の来文に関して：日本語訳は蒙古文による。この来文が如何に機械的に、漢語の語序により、蒙古語文法を無視して、単に単語を羅列しているに過ぎないかを明示する為め対訳の形をとった。(山崎(1951:62)：凡例の一条)

『回回館訳語』の来文に関して：来文の性質を考えるため、第一の来文をみると、そのペルシア文が漢文の文字通りの逐語直訳であり、ペルシア語としての体を成していないことがわかる。(本田(1963:152))

『西番館訳語』の来文に関して：この来文では、西番語の形態素連続は、多くの場合、単に漢文をそのまま置き換えた連続であり、もはやチベット語として十分に理解できないほどにゆがめられた形をとっている。(西田(1970: 122))

『女真館訳語』の来文に関して：[...]but, as in the *Memorials* 【引用者注：来文を指す】 of any of the other language sections of the *Hua-i i-yü* 華夷譯語, sentences of the Jurchen version are described syntactically in Sincized form. For example, each Jurchen word is literally translated from the Chinese. As a result, the word order of the Jurchen sentences is exactly the same as that of the Chinese version. (Kiyose(1977: 151))

上掲の四研究のいずれにおいても、漢文を逐語訳したことに伴う破格な文法構造の例が、具体的に挙げられている。

中には、『緬甸館訳語』の来文のように、漢文を、一字一字、緬甸文字によって音訳しているだけ

1 石田(1973:10)。

2 即ち、女真、韃靼、高昌、回回、西天、西番、緬甸、百夷、八百、暹羅の各言語。日本、琉球、朝鮮、ベトナムなどの言語がここに入っていないのは、これら諸国との外交文書が専ら漢文だったからである。同じ『華夷訳語』でも、外交使節の接待を所管する「会同館」編纂のシリーズである丙種本の中には、これら諸国の言語の『訳語』が全て揃っている。通事(口頭通訳者)の養成を念頭に置いていたからである。

であるものさえ存在する<sup>3</sup>。そうであるとすれば、乙種本の来文の言語史研究資料としての価値が疑われるばかりでなく、これら来文がいかなる需要を満たすために編纂されたのか、何のために『訳語』に附せられたのか、が問題となってくる。

本稿で取り上げる『高昌館訳語』の来文(以下、高昌館来文と呼ぶ)は、見ることのできる分量が89通と乙種本来文の中では比較的多い。この資料を使って、明代の四夷館における漢文から異民族言語への翻訳の実態を検証してみたい。

## 二、『高昌館訳語』とそのウイグル文字

『高昌館訳語』は、他の乙・丙種本華夷訳語と同様、正確な成立時期は不明であるが、四夷館が設立された永樂五年(1407)以後に成ったものである。本書の記述する“高昌語”の性質について、庄垣内(1984:53-54)では、来文の内容を根拠として、明代に「土魯番、哈密を中心としたウイグルスタンで使われていた言語」であると、これを丙種本に属する『畏兀兒館訳語』が記述する明代ウイグル口語と対照させる意味合いで明代ウイグル文語と呼んでいる。以下本稿では、この言語を単に「ウイグル語」と呼び、現在中国や旧ソ連地域に住むウイグル族の言語に言及する場合は、これを「現代ウイグル語」と呼ぶことにする。

本書におけるウイグル語の表記には、音訳漢字(雑字部分のみ)のほか、中東のアラム文字より派生し、ソグド文字を経由して、ウイグルスタンのチュルク系民族にもたらされた文字(ウイグル文字)が用いられている。庄垣内(1986:99)は、本書をウイグル文字文献の最も新しいものと位置付けている<sup>4</sup>。新疆の地は、カシュガル等西部地域では10世紀ごろから、トルファン等北部地域では14世紀から15世紀にかけて、徐々にイスラム化し、アラビア(あるいはペルシャ)文字に基づく文語が、従来のウイグル文字表記文語に代わって普及することとなった。『高昌館訳語』においても、来文にイスラム系と思しき人名が多数見られるほか、雑字(宮殿門)に「礼拝寺」:脉尺-ト哈兒mācīt buqarなる項目が見え、mācītは即ちアラビア語のmasjid(モスク)であるから、高昌語が通用していた地域においても当時イスラム化が進行中であったことがうかがえるが、『高昌館訳語』の語彙全体は、ペルシャ語やアラビア語からの借用語がそれほど多くはなく<sup>5</sup>、文字が旧来のウイグル文字であることと相俟って、イスラム化以前の言語相を示すのである。下って清代の『五体清文鑑』には回語(チャガタイ文語)が含まれているが、そこではアラビア文字系統の文字が用いられている。現代の新疆でも、一時期ラテン文字化が図られたものの、アラビア文字が一貫して使用されている。中国人民幣に印刷された現代ウイグル語の額面表示も、1950年代以来、一貫してアラビア文字表記である(正書法の多少の変遷はある)。

かくして、新疆におけるチュルク諸語の文字表記の歴史という点から見て、『高昌館訳語』は、ウイグル文字使用の最後の時期に位置する資料であると言える。『女真館訳語』が、女真族による女真文字使用の最後の時期にあたるのと似た状況である。

## 三、高昌館来文

3 荻原(1965:25) ; 西田(1972:164)。

4 ウイグル文字は、甘肅の仏教社会という特殊なサークルの間ではその後も用いられ続け、最も遅く書き写された資料は、清朝の康熙26年(1687)の日付があるウイグル語訳金光明最勝王経であるとされる。但しこの文献を扱った護(1962:73-74)は、写経という特殊な現象だけから、ウイグル文語がその時代までその地で生きて使われていたと断言してよいかどうかに関して、疑義を呈している。

5 庄垣内(1982:28; 1984:161)に、丙種本『畏兀兒館訳語』の言語と比べて、本書のウイグル語にはアラビア語・ペルシャ語・モンゴル語などからの借用語が少ないと指摘されている。

### 3.1 先行研究

高昌館来文の全文をローマ字転写し、フランス語に翻訳した上注釈を施したものにLouis Ligeti(1967-68)がある。Ligetiはまた、高昌館雑字(本編部分と、その続編glossaire supplémentaire)・来文に見える語彙の詳細な語釈をLigeti(1966)、Ligeti(1969)として別に発表しており、語彙をローマ字転写してアルファベット順に配列した上、各項の語のチュルク諸語文献・現代チュルク諸語・モンゴル諸語・ペルシャ語などにおける出現状況をいちいち挙げていたいへん有用である。漢語からの借用語や、漢語を直訳した複合語などについても記載している。本稿のウイグル語形式のローマ字転写と語義の解釈は、基本的に、Ligeti氏の諸研究に依っている。

高昌館来文の一本である『高昌館課』の漢文・ウイグル文の全文を活字化したものに、胡振華・黄潤華(1981)がある。漢文には簡体字を用い、ウイグル文は当時の中国において現代ウイグル語の公式の文字であった「新文字(Yengi Hərpi)」、即ちラテン文字正書法を用いて転写されている。本書のいくつかの問題点に関する指摘は、次に挙げる莊子儀氏の研究(莊(2018: pp.108-110))に譲るが、本書には量は少ないものの注釈があり、一定の参照価値がある。なお胡・黄(1981:6)は、来文が反映する来貢の年代について、出現する人名から、十五世紀後半から十六世紀にかけての時期であるとしている。

最近の研究には莊子儀(2018)がある。莊(2018)は漢語音韻史の研究であり、『高昌館課』中に見えるウイグル文字表記漢語や、補助的には固有名詞の漢字表記をも利用して、そこに反映された漢語の音韻体系を帰納している。ウイグル文字によって表記された漢語音については本稿の主題から外れるのでここで詳しく紹介及び論評をしないが、この資料のウイグル文字表記漢語を音韻資料として扱う際には、明代以前(特に、元代)における、ウイグル文字(ウイグル式モンゴル文字を含む)による漢語の音訳方式の伝統に対して考慮を払う必要があるという点を指摘しておきたい。なお、庄垣内(1986)はウイグル文献に見える漢語音全般に対する音韻史的研究で、高昌館来文も取り扱っている。

### 3.2 来文の諸本と通数

高昌館来文には、東洋文庫所蔵明抄本、内閣文庫蔵「西域同文表」、ベルリン図書館蔵明抄本、Amiot招来清抄本(パリ国立図書館蔵)、G. Rose蔵本、「続修四庫全書」所収本、中国国家図書館蔵明抄本などがあり、中国国家図書館本には『高昌館課』という書名がついている。

ベルリン図書館本は同図書館のwebpage<sup>6</sup>から閲覧できる。Amiot招来本は京都大学文学研究科図書館が写真本を蔵している。『続修四庫全書』所収本(2002年、上海古籍出版社、経部、第230冊)は「休寧汪季青家蔵書籍」「復旦大学図書館蔵」の印があり、愛如生電子版「四庫全書」の中の一冊として閲覧できる。中国国家図書館本『高昌館課』については、『北京図書館古籍珍本叢刊6 経部』に影印が収められている(以下、「北京本」と称する)。筆者が今回本稿を準備するにあたり利用したのは、いずれも上述のベルリン本及び北京本である。

各本の通数は異なる。一つの文書の漢文文面とその対訳文面とを合わせて「1通」と数えた場合、ベルリン本には40通の来文が収められており、一方北京本には89通の来文が収められている。続修四庫全書所収本の通数は56通であり、東洋文庫本とAmiot招来本の通数は、いずれも15通である。通数が最も多いのは北京本であるが、北京本になくベルリン本等に存在するものが2通ある。また、北京本がウイグル語文面を欠くものが3通あるが、そのうちの1通のウイグル語文面は東洋文庫本によって補うことができる。本稿で利用できた来文の通数は、北京本の87通(うち1通のウイグル文面は東

6 <https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/suche/>。「hua yi yi yu」で検索すると、「華夷譯語 24本」と書かれたリンクが表示され、このリンクからアクセスすることにより、原本のカラー写真を見ることができる。

洋文庫本を参照)とベルリン本の2通の都合89通である。

### 3.3 来文におけるウイグル文の書写方向

各本を通覧してまず異様な印象を受ける点は、ウイグル文字が漢文と同様、右から左へ改行されている<sup>7</sup>ことである。一般にウイグル文字は縦書きされ、行は左から右に移る(ウイグル式モンゴル文字や満洲文字も同様)。これは、ソグド文字の段階ではもともと右から左に横書きされていた書写方向が、ウイグル文字のある歴史段階において左回りに90度回転した結果である。本書は漢文との対訳であり、全体として漢籍の体裁に従ったためにウイグル文も右から左に改行したものに過ぎないのかもしれないが、実際には本書は漢文とウイグル文とを隣り合った別々の頁にレイアウトしているのであって、単に装丁の都合であれば、一つの半葉内におけるウイグル文の改行方向まで変更する必要はないはずであるから、“夷”が“華”に従う本書の姿勢を象徴する処理をしていると言えなくもない<sup>8</sup>。

### 3.4 対訳文書の順序

ベルリン本の来文には、高昌館のほか韃靼、女直、西番、回回、百夷、八百、暹羅の各館のものがある。いずれの語種においても、まず漢文文面があり、次いでその異民族言語文が配置されている。漢文が先、異民族言語が後であるのは、雑字部分の対訳においても同様であり、『華夷訳語』という名を持つ本書としては当然のことであると言える。

今回参照したもう一本の高昌館来文である北京本は、胡振華・黄潤華(1981)の紹介によれば全四冊、明代の抄本で、白綿紙、青絲欄、框高23cm、幅15cm、表紙に康熙年間の進士である張瑗の「張瑗蓮若章」「玉堂侍御」の二つの印章が押されている；はじめの三冊がウイグル語文と漢文の対訳で、後の一冊はウイグル式蒙古文字表記のモンゴル語と漢文の対訳である<sup>9</sup>。

北京本の巻頭にはウイグル文のテキストがあり、その後ろに漢文がある。以下、ウイグル文と漢文が交互に配置される。この体裁は一見、ベルリン本とは逆のようであるが、検討してみると、巻頭のウイグル文は、その次に配置された漢文とは異なる内容であり、両者が対訳の関係にはなっていない。ベルリン本との比較によって、北京本巻頭のウイグル文は、ベルリン本の二通目のウイグル文にあたり、対応する漢文を欠いていることがわかる(その次の漢文は、そのさらに次のウイグル文と対訳関係にあり、ベルリン本の第三通に当たる)。おそらく、もともとは巻頭に漢文があったのであろう。北京本にはほかにも、漢文、ウイグル文のいずれか一方の訳文が欠けたところが数か所あるが、欠けがあるたびに次の表文の漢文とウイグル文の順序が入れ替わるため、ウイグル文と漢文が交互に配置される点自体は少しも乱されない<sup>10</sup>。対訳の一方の言語に欠けのあるテキストが存在するにもかかわらず、漢文文面とウイグル文の文面とが交互に配置されるという形式だけが遵守されるような体裁は、この学習書の使用者にとってあまり意味のあることとは思えず、北京本を装丁した人物が、外観上「対訳」に見えることを目指して、両言語の文章が機械的に交互に並ぶようにのみ気を配り、実際の内容

7 『高昌館課』と同じく乙種本華夷訳語に属する『韃靼館訳語』の来文(ベルリン本)においても、ウイグル式モンゴル文字表記のモンゴル語文の行が、本来の左から右ではなく、右から左へと進んでいる。

8 乙種本華夷訳語全てがこのようであるのではない。例えば西番館雑字や暹羅館雑字の場合、チベットやタイの文字がその固有の書写方向通りに左から右へ横書きされているだけでなく、添えられた音訳漢字まで左から右に横書きされ、高昌館来文とは逆に、“華”が“夷”に従っている。ただ、両館の来文の漢文は、通常通り縦書きされ、行は右から左へと改行される。

9 胡・黄(1981:3)。

10 例えば、第1通のウイグル文に続く第2通から第6通までは漢文が先、ウイグル文は後であるが、第7通は漢文だけでウイグル語を欠いており、それに続く第8通はウイグル文が先、漢文は後になる。第35通までその順序が続いた後、第36通は漢文を欠きウイグル文だけである。するとそれに続く第37通からは、漢文が先、ウイグル文が後という順序となる。

上の対訳関係には気を配らなかったことを示す。テキストに対するこのような扱いから考えて、北京本に関わった人々は、すでにウイグル文字を解さず、専ら保存するためにこの書を装丁したものである。

### 3.5 来文の例示

高昌館来文が具体的にどのようなものであるのかを示すため、ベルリン本の第一通の漢文とウイグル文の文面を掲げる。漢文は原文の縦書きを横書きに改め、字体も現代日本通行の新字体に改めるが、擡頭は反映させてある。

(漢語文面)

哈密地面差来使臣把把格等  
大明皇帝前叩頭奏奴婢地方風寒  
土冷無希物件今差使臣將阿  
魯骨馬四匹羚羊角三十枝進  
貢去了望  
天皇帝憐憫怎生  
恩賜奏得  
聖旨知道

(ウイグル語文面：Ligeti(1967:271-272)の転写による。微調整したところがある)

Qamul yir yangaq yumšap b čai kälip ilči Baba-kä bašlïy

Taiming qağan tapuqında baš čal öcip qul kiši yir sarı yäl soyuq boldı b qam topraq soyuq tongdı b  
ling yoq tangšuq näm-ä türklüg amtı yumšap b čai ilči tutum ar-ğumaq tört bi soy-a üč on čibiq-ı tartıp  
bardı inayat b ong

Tngri qağan irinčkäp b län min nätäg m-a

utlı soyurqap b si öcip tapdı

yarlıy bilür (段落記号)

このウイグル語の文面は、先行研究においても指摘される通り、漢語文面の機械的逐語訳である。その雰囲気伝えるため、試みに、本稿筆者が同じ手法で漢文を日本語に逐語訳したものを掲げる。日本語はウイグル語とは語順や文法関係の表し方がよく似ているので、逐語訳した場合の奇妙な印象がある程度類推されよう。漢字は使わず、片仮名だけを用いる(仮名では語義が判然としない場合、[ ]に入れて漢字を示す)。また、語を分かち書きする。

(日本語“訳”)

ハミ チ[地] ツラ サシムケテーチャイ<sup>(注1)</sup> キテ ツカイノモノ ババ・ケ ラ

ダイミン オオキミ マエニ アタマ タタケ モウシテ シモベ ヒト チ カタ カゼ サ  
ムクナレリーハン ツチ ツメタクゴゴエリールン ナシ マレ モノ クダン[件] イマ サシム  
ケテーチャイ ツカイノモノ モ[以] ツテ アルグマツク ヨツ ピ<sup>(注2)</sup> レイヨウノツノ ミツ  
トオ エダ[枝] ミツギテ イ[往]ニタリ メグミーワン

アマ オオキミ アワレミテーレン・ミン イカン[如何]

ゴオン[御恩] タマワリーツー モウシテ エ[得]タリ

ミコトノリ シ[知]ラン

注1：高昌館来文には4.3に後述する通り“b”という語が頻出する。ここでは“—”(ダッシュ)に置き換えておいた。“b”の後ろは、やはり4.3において述べるように、漢語音の音訳であるから、日本語訳でも漢語音を片仮名化して示す。

注2：高昌館来文において、この語は単にbiと音訳されているのみであるので、ここでも「ピ」とだけ“訳”した。この来文の大意は以下の通りである。

ハミ(哈密)の地から遣わされて参りました使臣、ババ・ケ(把把格)らが、大明皇帝の御前に叩頭しつつ奏上いたします。弊地方は土地が寒冷であり、珍しい物産もございませんが、今ここに使臣を遣わしてアルグマック(馬)四頭、羚羊の角三十本を貢ぎに参りました、願わくは天なる皇帝におかれ憐れみ下さいまして、何卒お取り計らいくださいますよう。奏上し得ましたら、聖旨に基づいてご決裁を。

### 3.6 来文に見られるウイグル語の語形

ウイグル語は、チュルク系言語一般がそうであるように、名詞や動詞の語幹に、一個、あるいは二個以上連なった接尾辞を添加して文法関係を表示するタイプの言語(膠着語)で、名詞には複数語尾、所有人称語尾、格語尾などがつき、動詞には時制・法・人称などを表す語尾、形動詞語尾、副動詞語尾などがつく。そして、名詞や動詞の語幹自身も、さまざまな派生語尾をつけることによって形成され得、品詞をまたぐ語の派生(例えば、動詞から名詞を派生するなど)も極めて盛んである。従って、ウイグル語の文章を綴るには、一つ一つの語に、その語が文中において果たす文法的意味に応じて、適切な接尾辞をつけていくことが必要となる。

ところが、高昌館来文において、語は、何回現れようとも、また文中でどのような文法的地位を帯びて現れようとも、常に一定の語形で出現する。例えば、tilä-「乞討/討」という動詞は28回出現するが、その全てはtilä-ptürという現在終止形で現れる。また、soyurqa-「賞賜/賜/頒/賞」という動詞は89回出現するが、その全てはsoyurqa-pという副動詞形である。来文の実際の文脈や文法関係は、基本的に、語形には反映されない。これが、先行研究において「来文」が文法を無視した逐語訳であると言われる一つの理由である。

稀には同一の語が文法機能に応じて訳し分けられる場合もあり、例えばbar(行く)という動詞は資料中に55回現れるが、うち漢文の「去了」を対訳した箇所は33あり、そこでは適切にも完了形を用いてbar-diと訳されている<sup>11</sup>。一方漢文の「去」を対訳した箇所は22あり、ここではbar(ゼロ語尾形式)という対訳語が現れる。「去了」と「去」の対訳に限定して調べてみるとこのようであるが、漢文面に見られる「了」一般に焦点を当てて検討すると、「去了」以外の動詞句においては、「動詞+了」が必ずしもウイグル語の-di完了形には訳されていない。そこでは、漢文面に「了」が用いられていると、ウイグル語の側では、動詞には様々な形を用い、その後ろに「了」を音訳したläuを置いている。例えば：

得了：tapdi läu (北京本第41通)

進貢了：tartip läu (北京本第25通)

有罪了：bar ärki yazuq läu (北京本第60通)

上の例のうち“得了”は、本来tap-di(tap-「得る」の完了形)だけで十分正確に訳せている(人称の一致については問わないとして)のに、“了”をわざわざ音訳してläuとして付け加えており、文字通りの蛇足となっている。実際のところ、来文の漢文文面に“得”字は非常に多く現れるが、そのウイグル訳は常に固定されていて、tapdiとなっている。第二の“進貢了”の場合、ウイグル語の動詞部分

11 この「了」の使用にも現れている通り、高昌館来文の漢文は、全体に、文言文を基礎としながらも、規範的な漢文と比べると話し言葉的であると言える。

tartip「貢いで」は副動詞形を取っており(“進貢”は102個の用例全てにおいて副動詞形tartipで現れる)、第三の“有罪了”に至っては、bar ärki「有」+yazuq「罪」+läu“了”(音訳)と、漢文を、語序もそのままに、一字一字直訳している。

来文のウイグル語は、以上のような硬直的直訳である。

## 四、来文と雑字の関係

### 4.1 「来文」中の語形と「雑字」所載の語形との一致性

来文の漢語文面を構成している個々の語句は、人名などの固有名詞を除くと、そのほとんど全てを、対訳語彙である雑字の見出し漢語として見つけることができる。そして、それに対応するウイグル語の語句もまた、後述する音訳語を除き、ほとんどの場合、雑字におけるその語の対訳と同じである<sup>12</sup>。語幹が一致するのみならず、語尾も一致する。上に例を挙げたtilä-ptür「乞討」、soyurqa-p「賞賜」、tap-di「得」などは全て、雑字において、この通りの語形で現れる。このことから、来文の作成にあたっては、漢文がまず先にあつて、漢文文面からの翻訳によってウイグル語文面を作成した際に、雑字が利用されたことがはっきりわかる。我々がウイグル語の文章として来文を読んだ場合に語形が文法的に適合しない事例が頻出するのは、来文のウイグル訳を作成した者が、雑字に載せられた語形をそのまま用いたことによるものである。

### 4.2 雑字「続編」と来文との関係

#### 4.2.1 雑字の本編と続編

『高昌館訳語』の雑字には、本編部分と続編とがある。本編は、『華夷訳語』の他の語種の雑字と同様、部門別に整然と分けられ、それぞれの門類には、漢語とウイグル語の対訳の形式により、数十の語句が収められている。高昌館雑字本編の門類は次の通りである。

天文門	天文について
地理門	地理について
时令門	季節・時候について
花木門	植物について
鳥獸門	動物について
人物門	家族・職業など人間関係について
身体門	身体各部について
宮殿門	建築物とその各部について
器用門	道具・器物について
衣服門	服飾について
珍宝門	宝石や貴金属について
飲饌門	食品や酒類について
文史門	文書について
方隅門	方角について
声色門	色について
数目門	数と度量衡単位について
人事兼通用門	形容詞・動詞・副詞・虚辞など

12 但し、今回資料とした89通の中には、雑字には見出せないウイグル語の単語が、人名・地名を除き、筆者が調べた限り10個(異なり語数。総使用度数は14回)使用されている。

各門類のもとに収録された語彙の内容は各本とも全て同じで、総項目数は716である(Amiot招来本は4項を欠き、後述する天一閣本は初めの244項を欠く)<sup>13</sup>。

一方、続編は、本編にすぐ続けて配置される場合もあれば本編とは別冊になっている場合もあるが、収められた語彙が本編とは重複しておらず、本編に対する増補部分としての性格を帯びている。「続増」と題されているものもある。続編は、少なくとも、いずれも明代のものとしてされる次の諸本に存在し、収められた項目数がそれぞれ異なる。

(1)『北京図書館古籍珍本叢刊6 経部』の影印による中国国家図書館蔵明抄本『華夷訳語』(109-123頁)。「北京本」と略称する。「続増」と題する、「始」に始まり「知道」に終わる78項目(影印本109-113頁)と、「華夷訳語」と題され「忠」に始まり「賞賜去」に終わる146項目(影印本114-123頁)を含む。

(2) 東洋文庫蔵の写真帖(請求番号XI-5-3)。「東洋文庫本」と略称する。「忠」に始まり「賞賜去」に終わる146項目(「忠」から「丈」までの38語は「人事門」と題され、「朝」から「賞賜去」までの108項目は「通用門」と題されている)と、「公」に始まり「金洗面盆」に終わる62項目から成る。後者は「方物門」と題されているが、内容は必ずしもその門類名称に合ったものではない。

(3) Hirth招来ベルリン国家図書館蔵『華夷訳語』。「ベルリン本」と略称する。「忠」から北京本の「賞賜去」までの146項目に加えて、「開」に始まり「番紅花」に終わる40項目、及び「公」に始まり「金洗面盆」に終わる62項目を含む。北京本の「続増」の78項目は含まれない。なお、当本は「朝」から「塞」までの40項目が途中78項目を挟んで二度繰り返されている。この本も脚注6に示したベルリン図書館のwebpageから閲覧できる。

(4) 天一閣博物館蔵明刻本『華夷訳語 高昌館』。下巻。「天一閣本」と略称する。このテキストは雑字本編の「人物門」以降の472項が残っていて、続編部分は、北京本の「続増」にあたる部分を、本編の「人事兼通用門」にそのまま続く形(つまり、「続増」などのタイトルをつけたり葉を改めたりしてそこで新しい内容が付け加わっていることがわかるようにはなっていない形)で含む。

以上の他、Ligeti(1969)は、Radloffが研究しBritish Museum(現在のBritish Library)に蔵されているとする高昌館雑字のうちの続編部分に、ベルリン本にはない語彙が含まれているとして、その部分の写真を公開している。写真を見るに、この本が含むのは「始」に始まり「往来」に終わる72項目で、北京、天一閣両本にある「始」に始まり「知道」に終わる78項目のうちの最後の6項目が欠けた形となっている。音訳漢字の特徴は北京本よりも天一閣本に近く、続編冒頭に「続増」などのタイトルが冠せられない点も天一閣本に類似する。

北京本、東洋文庫本、ベルリン本、天一閣本の四本に附された続編はそれぞれ項数に出入りがあるものの、内容上の一致性は高い。各本の続編においては、項目が数十個連続したところで葉が改められ、ある場合にはそこに空の半葉が挿入された上で、次の数十項目が続いていたり、そのような項目連続内の項目の配列順序が諸本相互間で全く一致しているなど、あるいはいくつかのまとまりが感じられ、これを根拠に、続編全体を群に分けることができる。群を分けておくことは、本「雑字」の形成過程や来文との関係を考察する上で有益であろう。ここでは、IからVまでの五群に分け、第IV群は説明の都合上更に前半(IV-1)と後半(IV-2)に分ける<sup>14</sup>。各群の諸本における所在を表にまとめる。各本の欄

13 高昌館雑字の本編部分には数多くのテキストがあり、本稿筆者はそのうちの10種のテキストを見た。本稿では基本的にベルリン本に依るが、ベルリン本の明らかな誤字は他本によって修正する。

14 五つの群に分ける根拠には、上に記した状況の他、この語彙集の配列特徴上の根拠がある。すなわち、本編の各門類では、まず見出し漢字が一字である項が配列され、続いて見出し漢字が二字であるもの、三字であるもの、…という具合に、見出し漢字の字数順の配列方式が取られているが、続編においても、見出し漢字

の○印は、その語群がその本に収められていることを表す。○の後ろに“続増”などとあるのは、その本において群の冒頭に付けられた題である。

群	本	北京本	東洋文庫本	ベルリン本	天一閣本	自/至	項目数	
I	○	“続増”			○	始—知道	78	
II				○		開—番紅花	40	
III	○	“華夷訳語”	○	“人事門”	○	“通用門”	忠—丈	38
IV-1	○		○	“通用門”	○	“人事門”	朝—塞	40
IV-2	○		○		○		委任—賞賜去	68
V			○	“方物門”	○	“方物門”	公—金洗面盆	62

かくして、諸本に含まれる続編の総項目数(異なり数)は326となるが、筆者は『高昌館訳語』の現存の全ての諸本を見たわけではないので、上記の五類以外の増補語彙が、まだあるかもしれない。

表にも記しておいたように、続編には時折「人事門」「通用門」「方物門」などの門類名が冠せられている場合がある。しかし、続編の各群に収録されている語句相互間に、本編の「天文」「地理」といった門類に見られるような整然とした意味的共通性は特段に感じられない。続編に収録された語句は、どの群も、本編の「人事兼通用門」と類似した意味領域の語句、すなわち動詞、形容詞、副詞や虚詞などが多数を占める。

#### 4.2.2 「雑字」収録語彙の「来文」中における出現率

次に、雑字と来文の関係を明らかにするため、本編及び続編の雑字に収録された語彙項目が、来文の中にどの程度出現するかについて統計する。

統計の際、雑字に見える漢：ウイグル対訳と全く同一の対訳関係が来文の側に見出せなくても、ウイグル語の部分に一定の共通性があれば、その雑字の語彙項目が来文に出現する、と見做した。具体的には次の三つの場合である。

(1) 雑字と来文の間でウイグル語は一致するが漢文は一致しない場合。例えば、雑字(人事門)の「婦：äpçi」に対して、来文では「妃：äpçi」なる対訳関係となって現れる類。

(2) ウイグル語の形態が雑字と来文の間で完全には一致しない場合。例えば、雑字(人事兼通用門)の「叩頭：baş(頭) čalisdī(čal-叩く + is相互態 + dī完了終止)」に対して来文では「叩頭：baş čal(動詞ゼロ語尾形式)」として現れる類。

(3) 雑字側では複合語の一部としてのみ現れ、来文側では単純語として現れる語の場合。例えば、来文には「人：kiši」という語が現れるが、この語は雑字側(人物門)では「老人：qari kiši」、「夷人：tašqari kiši」、「匠人：uz kiši」、「婦人：qatun kiši」など、複合語後部要素(「～の人」)として現れる。この場合、人物門に「人：kiši」という項目が独立に建てられてはいないが、kiši「人」という語自体は雑字中に認められるので、この一項目ぶんを「来文に見える語」として統計に入れている。

雑字の語彙の来文における使用率の統計表

◇雑字本編(紙幅の関係上門類ごとの統計は省き本編全体の統計のみ示す)

項目数	うち来文に見える語	比率(%)
716	170	23.7

が一字であるものが配列された後に、二字であるもの、三字であるもの…が配列されている。本編の体裁から推理して、見出し漢字が二字以上の項目が並んだあと、再び一字の項目が並び始めれば、そこに群と群の境目がある、と見当をつけることができる。なお、第IV群の1と2は、前者が見出し漢字が一字であるもの、後者が見出し漢字が二字以上であるものである。

## ◇雑字続編

群	項目数	うち来文に見える語	比率(%)
I	78	53	67.9
II	40	37	92.5
III	38	5	13.2
IV-1	40	39	97.5
IV-2	68	4	5.9
V	62	34	54.8
計	326	172	52.8

本編全体では、716項目のうちの23.7%にあたる170項目が、来文に見出される。門類別に分けて見た場合には来文での出現割合に多少の濃淡があり、例えば衣服門(50%)、声色門(44.4%)などは比較的高く、貢物としての衣料に関する語が来文に頻出することを反映する。一方で、天文門(9.5%)、花木門(5%)、飲饌門(0%)などに所属する語彙は来文にあまり出現しないか、全く出現しない。全体的には、本編所収の語彙項目の七割以上は、来文中には一度も現れていないことになる。これによっても、雑字本編が来文から語彙を抽出して編纂されたのではなく、来文以外の原資料に基づき、おそらくは来文よりも前に作られたものであると推測できる。

本編に対して、続編では、第Ⅲ、第Ⅳ-2群の語が来文に用いられている比率がごく低い一方、他の群は50%以上の語が来文に現れる。中でも第Ⅱ群と第Ⅳ-1群に属する語句は、ほとんどが来文に見出される。続編全体の平均では、所収語句の52.8%が来文に見出される。

本・続編全体を通じてみると、来文に現れるウイグル語の語句(異なり項数)のうちの342個が雑字に見出され、その内訳は本編が170、続編が172である。つまり、仮に来文作成者が本編だけを参照した場合、来文に出現する語句のほぼ半分しかカバーできないということである。残りの半分は、実際には続編に見出される語句である。

続編に収められた語彙が全体に来文に多く現れることは、続編が本編とは異なって来文から語彙を抜き取って作られたことを推測させる。この推測は、第Ⅱ群と第Ⅳ-1群についてとりわけ当てはまる。一方、続編の語彙項目で来文に一度も見えないものも一定数あり、中でも第Ⅲ群と第Ⅳ-2群に収められた語彙は、来文中にほとんど登場しない。第Ⅲ群と第Ⅳ-2群は本編と同じく来文以外の材料に基づいて編纂されたか、あるいは当時高昌館で教材として用いられた来文が他にも存在していて、そこから採られた語彙が収録されているのかもしれない。

## 4.3 「b」+音訳」の形式

来文のウイグル語文面には、しばしば、字母“b”単体の綴りが出現する。3.5に示した第一通にも *yumšap b čai kälip ; yäl soyuq boldi b qam ; topraq soyuq tongdi b ling ; inayat b ong Tngri qayan ; irinčäk b län min ; utli soyurqap b si*

のように見えている。第一通以外においても、高昌館来文の一通一通には、それぞれ数個の“b”が見出される。高昌館来文の“b”は、その後ろに、常に、ウイグル語固有の単語ではない、漢字音のように見える綴りを伴うことを特徴とする。なお、雑字には、“b”は見当たらない。

“b”の直前にある語がいかなる漢文文面の訳と対応しているかを知ることは比較的容易である。そもそも「来文」の対訳はウイグル語の文法を考慮しない逐字訳であり、また用いられた語のほとんどが「雑字」の対訳語彙の中に見つかるからである。今、上に取り出した“b”を含む用例について、ウイグル語文面の下に、対応する漢文文面を記せば次のようになる。

① yumšap b čai ② kälip

① 差 ② 来

① yäl ② soyuq boldi b qam

① 風 ② 寒

① topraq ② soyuq tongdi b ling

① 土 ② 冷

① inayat b ong ② Tngri ③ qayan

① 望 ② 天 ③ 皇帝

① irinčkäp b län min

① 憐憫

① utli ② soyurqap b si

① 恩 ② 賜

こうしてみると、“b”の後ろにあるウイグル文字綴りが、“b”の直前のウイグル語に対応する漢語(上で枠に囲って示した部分)の字音をウイグル文字に音訳したものであることは明らかである。

先行研究においても、この“b”の性質は簡潔に述べられている。胡振華・黄潤華(1981)は、“b”について「括弧の機能を持つものようだ。bの後ろは多く漢語の語句で、bの前のウイグル語の語句を説明するのに用いられる」(第一篇、1頁注釈③)と述べている。Ligeti(1969)は、この“b”を“u”と転写し、“ou; et”と語釈した上で、これをペルシャ語の等位接続詞のwaと関連付けている(Ligeti1969:206)が、この“u”について、古今のウイグル語や他のチュルク系言語での出現例を一つも挙げていない<sup>15</sup>。また莊(2018:117)は、“b”の後ろが常に漢語語彙の音訳であって例外が一つもないことを明確に述べている。本稿の筆者も、“b”が、その直前のウイグル語の語句に対応する漢語の語句の音訳を示す機能を持っていることを認め、以下、これを「“b”+音訳」と名付けて議論したい。

漢文の徹底した逐語訳であることを旨とする来文のウイグル語文面において、「“b”+音訳」は、意図的に附されている印象を強く与える要素で、特定のウイグル語の語句の後ろに附されている。即ち、「“b”+音訳」が必ず附される語と、全く附されない語とが、截然と分かれている。また、ウイグル語の側から見た時、ウイグル語の語句とその漢語対訳語の音訳とを並列する形式は、ちょうど日本語の文選読みを思わせるが、明代のウイグル語にそのような習慣があったのかは、本稿筆者にはわからない。かくして、「“b”+音訳」が、何の目的で、いかなる語に対して附されているのかが問題となるが、管見の限り、この問題はまだ論じられていない。

「“b”+音訳」が附される語は、資料全体を通じて全部で96語(異なり語数)がある。今、“b”の後ろにウイグル文字で音訳されている漢語と、“b”が附されているウイグル語の語句の雑字部分における漢語対訳語との関係に着目して、この96語を分析してみると、次のようになる。例は、それぞれ3つずつ挙げる。

(1) 雑字と来文の漢文面が一致しないもの。15例(異なり数、以下同じ)がこの類型である。この類型の来文の漢文面は雑字と一致しないと言っても、意味的にはごく近いため、雑字における同じ対訳語が用いられたものであろう。

雑字(漢語) 来文(漢語) 来文(音訳) 来文=雑字(ウイグル語)

15 現代ウイグル語にwä「～と」という接続詞があり、またトルコ語にもve「～と」という接続詞があるが、ペルシャ語のwaからの借用かもしれない。あるいは、ペルシャ語のものも含め、アラビア語のwa「～と」からの借用かもしれない。専門家の教示を請う。

婦	妃	fui	äpči
就	即	si	tauraq
看	視	ši	körüp

(2) 来文の漢文面が、雑字の漢語見出しの一部分となっているか、またはその逆。前者の場合が圧倒的に多い。28例がこの類型である。

雑字(漢語)	来文(漢語)	来文(音訳)	来文=雑字(ウイグル語)
寒冷	寒	qam	soyuq boldi
敬重	敬	king	aýirlap
書	文書	vun šiu	bitig

(3) 来文内部において、一つのウイグル語の単語が、漢文の複数の語と対応する。例えば下に挙げた最初の例の場合、雑字の「差遣 : yumšap」に対し、来文では「差 : yumšap b čai」、「遣 : yumšap b kām」の両様に現れ、「差」「遣」の二つの漢語に対して同じウイグル語のyumšapが当てられている。この類型に属するものは27例で、それらと対応するウイグル語の語句の異なり数は11であった。

雑字(漢語)	来文(漢語)	来文(音訳)	来文=雑字(ウイグル語)
差遣	差	čai	yumšap
	遣	kām	同上
賞賜 <sup>16</sup>	頒	ban	soyurqap
	賜	si	同上
	賞	šang	同上
皆	皆	käi	barča
	俱	kü	同上
	都	tuu	同上

(4) 来文の漢文面が雑字の漢語と同一である(この状況下では、通常「“b+音訳”」は附されないのに注意)。この種の用例は全て、雑字内では本編ではなく続編に立項されている語である。14例がこの類型である。

雑字(漢語)	来文(漢語)	来文(音訳)	来文=雑字(ウイグル語)
安	安	am	inč täg
憐憫	憐憫	län min	irinčkäp
可憐見	可憐見	ko län kän	kätirkäp

(5) 同じウイグル語詞が雑字の複数の語の訳に使われている。4例がこの類型である。

雑字(漢語)	来文(漢語)	来文(音訳)	来文=雑字(ウイグル語)
長	長	čang	uluy
*uluyは人物門「伯」: uluy ata、続編II「洪福」: uluy buyanにも見える			
歳	歳	sui	yaš
*yašは続編II「万寿」: tümän yašにも見える			
外	外	oi	tašqarī
*tašqarīは人物門「夷人」: tašqarī kišiにも見える			

(6) 雑字に見出せない語は全「来文」通じて10個あるが、そのうちの8つは“b”+音訳を伴う。

16 来文中のsoyurqapが、雑字と同一の「賞賜」を訳している場合には、“b”+音訳が附された例はない。Cf. 次項「皆」

漢語	音訳	ウイグル語
捉	čuu-a	tutup kâl
封	fung	bâlgü
京	king	kingši <sup>17</sup>

以上を通観すると、高昌館来文の「b」＋音訳は、類型(4)を除き、ウイグル語の語句に関して、その漢文の対訳語が「雑字」を参照しても確実に決定できない場合に、漢文の対応語句を示すために附せられていると推測できる。高昌館来文が四夷館での教科書として用いられていたものであることを考慮すると、編纂者がウイグル語のある決まった語句に「b」＋音訳を附したのは、学習者がウイグル語綴りから“もとの”漢文面を還元する作業の便のためであったのではないかと想像される。四夷館における異言語教学が、基本的に、1語か、せいぜい2～3語からなるフレーズについて、漢語と異言語の間で置き換える、という内容であったことをうかがわせる。

#### 4.4 音訳借用語

『高昌館訳語』には、もともと一定数の漢語借用語が含まれる。例えば雑字本編の花木門には「蓮花」：廉花linquu-a、同衣服門には「鞋」：黒qiu、「蟒龍」：蟒龍manglungなどの語項目があって、Ligeti(1966)はこれらを漢語からの借用であるとしている。来文にも「蟒龍」の使用例が見える。これらの借用語はしばしば、『高昌館訳語』のほか、古代ウイグル語や中期モンゴル語の資料にも広く見られるものであり、当時のウイグル語で実際に用いられていたものであると思われる。

これらに対して、来文には、前節4.3で扱った「b」＋音訳以外に、雑字には収録されていない一連の漢語からの音訳語が見られる。それらは、固有名詞や一部の普通名詞を除くと、音訳語として存在するのが非常に奇妙に思える語が多く、次のようなものがある。

量詞：ba「把」、bi「匹；疋」、čang「張」、či「隻」

虚詞：či「之」、läu「了」、mui「每」、sing「曾」、yä「也」、tuu「都」

助動詞：qam「敢」、mung「蒙」

名詞の一部分：(ton) fuu「(衣服)」

実詞：kingši「京[師]」、ong「王」、sau「銷」、silang「膝襪」、ui「衛」、yamun「衙門」

量詞・虚詞・助動詞といったものは、他の言語に翻訳することが確かに難しいと予想されるが、音訳の手法で翻訳するというのは、一般には考えにくい。実際、この種の音訳語の使われ方はたいへん奇妙なものである。例は随所に見られるが、ここでは4つだけを挙げる：

四匹羚羊角：tört bi suy-a (ベルリン本第1通)

不敢違背：tüzi qam qarišip (北京本第43通)

不曾進貢：tüzi sing tartip (北京本第60通)

賞賜衣服表裏：soyurqap ton fuu için tačın (北京本第20通)

また“了：läu”の例は、3.6に挙げておいた。

来文においては、「原文」たる漢文があり、これを頭からウイグル語に逐語訳していく方式が取られている。来文の編纂者のもとには、「不：tüzi」「違背：qarišip」のように、漢語とウイグル語の対訳語彙(雑字が、ほぼこれに相当する)があり、「翻訳」にあたっては、訳そうとする漢語語彙が対訳語彙の中に見つかれば、そこに示されている対訳のウイグル語単語を用いて、漢文の語順そのままに、かつウイグル語の形態論も無視して、ただ並べていったと考えられる。漢語の量詞や機能語の場合、

17 この語は漢語「京師」からの借用語である。

ウイグル語の側に対訳語が必ずしも見いだせないで、その場合は漢語をウイグル文字によって音写したのであろう。ここにおいて、「原文」である漢字を、たとえ対応するウイグル語詞が無くても、一字残らずとにかく訳さなければならないという強い方針が存在したと見なければならない。即ち、量詞や機能語の音訳は、拙劣に翻訳された結果であるというよりは、翻訳文の一字一句にはその根拠として漢語の“原典”が必ず存在すべきであるという、それなりの翻訳思想の具現であるとするべきかもしれない。

高昌館雑字の本編にはこの種の音訳語が基本的に見出されず、ただ人物門に見える南方系民族名「百夷」：把亦bay i、「緬甸」：免店mäntän、「八百」把把babaなどが、当時のウイグル語に実在した借用語であるのか疑われる程度である。雑字の続編においては、「太師」：taiši、「総兵」：sungping、「都督」：tuu tu、「指揮」：čiqui、「参政」：sangčim、「同知」：tungčiなど官名が第V群にまとまって収録されているほか、明の国号「大明」：tainingが第II群に収められている。これら官名や国号は中国特有のものであるから音訳された形で収録されていても不思議ではない<sup>18</sup>。続編に収録された語句でウイグル語として実在が疑わしい音訳借用語は、実際には、いずれも第I群に見える

「哉」：哉sai

「功劳」：功劳kunglau

の二つだけである<sup>19</sup>。このように、来文には頻繁に用いられた量詞や助辞などの音訳語が雑字部分にほとんど収録されないことは、これらの語がウイグル語本来の語ではないという認識を、『高昌館訳語』の編纂者が実際には持っていたことを示しており、雑字と来文の間に言語観のずれが見出される一つの例となっている。

#### 4.5 雑字におけるウイグル語文法の反映

来文が漢文の逐字的置き換えであり、ウイグル語の語順が無視され、ウイグル語の形態変化規則が極めて限定的にしか応用されていないのと比べ、雑字ではウイグル語の文法や表現に対する一定の考慮が見られる。これもまた雑字と来文の間に存在する質的なずれであるが、先行研究においてあまり明確に述べられていないので、幾つか例を挙げて指摘してみたい。

##### (1) 目的語＋動詞

ウイグル語本来の動詞末位語順は、雑字では正確に反映されている。

【文史門】「読書」：必的-兀黒bitig oqi（書-読め）

【人事兼通用門】「惜民」：因-坤泥-阿夕喇il künni asirap（人-民を-慈しんで）

【続編第IV-2群】「焼香」：苦失苦欲兒küši köyür（香-焼け）

##### (2) 格語尾の使用

【地理門】「関口」：塔佞-阿黒思tay-niŋ ayüz（山-の[属格語尾]-口）

【人事兼通用門】「愛軍」：扯力泥-膽喇čärig-ni taplap（軍-を[対格語尾]-愛して）

##### (3) 複数の語尾がついた形式

【数目門】「無数」：撒那古禄雪思sana-γuluq-suz（数え-たもの-のない）

【人事兼通用門】「曉諭」：兵都兒尊bil-tür-sün（知ら-しめる-ように(せよ)）

##### (4) 特徴的な数表現

18 これらの官名の一部は、韃靼館来文にも見え、また元代のウイグル式蒙古文字による蒙古語の碑文にも見られる。例えば韃靼館来文には指揮jiqui、都督dudu、千戸semγu、総兵süngbingなどが見え(ローマ字転写は前者は山崎(1951)、「総兵」は烏雲高娃(2005)による)、1362年のモンゴル語碑文(いわゆるHindu碑文)には参政samjing、同知tungjiが見える(Cleaves(1949))。

19 来文中では、「功劳：kunglau」は8回現れる(但し、うち一つは「功」の対訳)が、「哉：sai」の用例はない。

【時令門】「二月」：以謹尺-哀ikinti ai（「二」に正しく序数詞を用い、しかも通常の序数形成接辞-(i)nčiとは別の不規則な-(i)ntiを正しく用いている）

【数目門】「三十」：兀都思otuz（20、30、40、50、60、70が一語で表されるチュルク系言語の特徴を正しく反映する。来文では、「三十」はüč on（三-十）と漢語の直訳になる）

雑字の作成が来文に先立つのだとすると、四夷館におけるウイグル語に対する把握の度合は、雑字編纂時から来文編纂時に至って、逆に低下した、と見るほかない。

## 五、結論

『高昌館訳語』の来文は、従来言われるように、漢文の原文を、ウイグル語固有の文法構造を無視する形で、ウイグル語に逐語訳して作成されたものであることが、改めて確かめられた。来文において漢文の逐語訳に用いられたウイグル語の形態は、基本的に、雑字の本編・続編に見える形式に一致する。高昌館の館員が、来文の編纂過程で漢文文面をウイグル語に「翻訳」する際には、雑字本編の中にある語彙についてはそれを利用したが、ないものについては、何か別の対訳資料(語彙の形に整理された資料というよりは、文章の形になっているものであったかもしれない)を利用したと考えられる。実際に来文に用いた語彙はカードに取られるなどして「雑字」の側にフィードバックされ、それが今日見ることのできる続編となったのだろう。

雑字の正編部分の作成にあたっては、今日の言語調査と同じように、見出し漢語に対応するウイグル語の単語を、ウイグル語を知る人物(ウイグル語の母語話者か、ウイグル語を習得した漢人)にウイグル語訳させ、記録していく手法も取られたと想像されるが、特に動詞の形態が一律でなく、終止形(述語になり、時制のある形)、連用形(副動詞)、命令形など様々な形が見られることから、続編部分と同様、先行する何らかの漢・ウイグル対訳の書面資料から抜き取られて作られた部分もあったと考えなければならない。雑字の作成においては、4.5に見たように、ウイグル語の[目的語+動詞]という基本語順や、いくらかの格語尾の知識なども活用されたが、来文が作成される段階においては、ウイグル語の文法を全く無視した「逐語訳」の方式が採られるに至った。設立当初は別として、来文が作られた十五世紀後半から十六世紀の頃には、高昌館でのウイグル語の教学内容は、すでにかなり限定的で、主として文字・発音の習得と、漢語語彙とウイグル語語彙との対応関係の習得にあった、と見なければならない。即ち形態論と統語論が欠落している。もともと中国伝統の言語学は訓詁(語彙学)・文字・音韻の研究が中心であり、文法方面が手薄であったことを考えると、「来文」に見るウイグル語文法に対する無視も、あるいは自然な成り行きであったのかもしれない。乙種本の来文が全体に同じような状況であることから、来文の編纂時には、異言語話者からの十分な支持が得られなかったようである。

## 参考文献

- 石田 幹之助(1930)「女真語研究の新資料」。もと『桑原博士還暦記念東洋史論叢』所収、今、石田幹之助(1973)、3-69頁所収による。
- 石田 幹之助(1973)『東亜文化史叢考』。財団法人東洋文庫、1973年3月。
- 烏雲高娃(2005)《永乐本〈华夷译语〉鞞鞞馆“来文”校释》。《欧亚学刊》第五辑，中华书局，257-285頁。
- 荻原 弘明(1965)「東洋文庫本華夷訳語・緬甸館雑字——附、訳史紀餘・緬甸国書——についての覚書(緬甸史雑考Ⅲ)」。『鹿大史学』13、1-28頁。
- 胡 振華・黄 潤華(1981)《明代文献〈高昌馆課〉(拉丁文字母译注)》。新疆人民出版社。
- 庄垣内 正弘(1984)『『畏兀兒館訳語』の研究—明代ウイグル口語の再構—』。『内陸アジア語の研究Ⅰ(外国学研究(神戸市外国語大学)16)』、51-172頁。
- 庄垣内 正弘(1986)「『ウイグル文献に導入された漢語に関する研究』」。『内陸アジア語の研究Ⅱ(外国学研究(神戸市外国語大学)17)』、17-156頁。
- 莊 子儀(2018)『『高昌館課』中的漢回對音』。中華民國聲韻學會『聲韻論叢』第21輯、臺灣學生書局、103-140頁。
- 西田 龍雄(1970)『西番館訳語の研究—チベット言語学序説—』。松香堂(華夷訳語研究叢書Ⅰ)。
- 西田 龍雄(1972)『緬甸館訳語の研究—ビルマ言語学序説—』。松香堂(華夷訳語研究叢書Ⅱ)。
- 本田 實信(1963)「『回回館訳語』に就いて」。北海道大学文学部紀要11、222-150頁。
- 護 雅夫(1962)「ウイグル語訳金光明最勝王経」。『史学雑誌』71編9号、66-81頁。
- 山崎 忠(1951)「乙種本華夷訳語鞞鞞館来文の研究—東洋文庫本—」。『日本文化』第31号(天理大学宗教文化研究所編)、62-91頁。
- Cleaves, Francis Woodman, 1949, The Sino-Mongolian Inscription of 1362 in Memory of Prince Hindu, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 12, No. 1/2, pp. 1-133.
- Kiyose, Gisaburo N. 1977, *A Study of Jurchen language and script*. Hōritsubunka-sha.
- Ligeti, Louis, 1966, Un vocabulaire sino-ouïgour des Ming, le Kao-tch'ang-kouan yi-chou du Bureau des Traducteurs, *Acta Orientalia Hungaricae*, Vol.19, pp.117-199; 257-316.
- Ligeti, Louis, 1967-68, Documents sino-ouïgours du Bureau des Traducteurs, *Acta Orientalia Hungaricae*, Vol.20, pp.253-306; Vol.21, pp.45-108.
- Ligeti, Louis, 1969, Glossaire supplémentaire au vocabulaire sino-ouïgour du Bureau des Traducteurs, *Acta Orientalia Hungaricae*, Vol.22, pp.1-49; pp.191-243.